紅旗征戎非吾事Ⅴ

15 世紀から 17 世紀の大航海時代が終わると、商人や役人など、冒険家ではない普通の人が、ヨーロッパから世界各地に出かけて仕事をして、さまざまな人種や民族に出会う。それまで、ヨーロッパンの人は黒人は知っていたけれど、その他の民族や人種には詳しくなかっただろう。アジア、アフリカ、南北アメリカに長期滞在した人は、当然、現地の言葉に詳しくなるので、異なる人々は使う言語の共通性や違いに気が付く。リンネに代表されるように、そのころの人の科学は膨大な収集と整理が主だから、言葉についても様々な言語を収集して、違いや共通性に基づいて、体系的に整理しようとした。これを比較言語学という。比較言語学は、ウイリアム・ジョーンズ（1746-1794）を嚆矢とする。ジョーンズは語学の才能にたけた人らしく、ラテン語・ギリシャ語以外に、ヘブライ語・ペルシャ語・アラビア語ができたらしい。インドに裁判官として赴任して、サンスクリット語を学んだらしい。サンスクリット語は古代語で、ヒンズー教の「リグヴェーダ」で使われている、インドの古代語だ。この言葉を学んだジョーンズは、1786 年に、サンスクリット語が、古代ギリシャ語やラテン語と共通の期限を有している可能性があることを指摘した。これが、インドからヨーロッパにかけての言語が、共通祖語から発展分離したとする、インド・ヨーロッパ語族という考え方の、始まりである。これがきっかけとなって、言語の共通性についての研究（特に音声学的な研究）が盛んになり、ヤーコプ・グリム（1785-1863:グリム童話を編集したグリム兄弟の長兄）がグリムの法則（インド・ヨーロッパ語族の祖語からゲルマン祖語に移る過程での子音の変化の法則）を発表した。こうした研究成果を受けて、そもそも、インド・ヨーロッパ語族の祖語がどんな言葉かという議論が起こる。同時にこれは、ヨーロッパ文明のそもそもの起源に関する問いかけでもあった。世界の多様性を知ったヨーロッパ人にとっては、そもそも自分たちはどこからきて、どこへ行く中のかという、自我にかかわる問題でもあったのだろう。そういうところへ、フリードリッヒ・マック・ミュラー(1823-1900)が出てきて、古代インドに侵入し、ドアラヴィダ人と混交し、後にサンスクリット語となる言葉を話した人たち（アーリア人）の言葉が、インド・ヨーロッパ語族の祖語だとして、インド・ヨーロッパ語族に入る言葉を話す諸民族を、アーリア人と呼ぶべきだと主張する。インド・ヨーロッパ語族の祖語が、アーリア人の話した言葉であるという主張に、大した根拠はない。フリードリッヒ・マック・ミュラーは宗教学者でもあって、仏教にも造詣が深かった。仏教を持ち上げるつもりで、ヨーロッパの文化の今回にある高貴な仏教というイメージを作りたかったのかもしれない。彼は意図的に人種差別的な意識から、アーリア人仮説を述べたわけでもないと思う。エキゾチックで神秘的なアーリア人（高貴な人）と同根だという発想は、当時のヨーロッパの人々にとって、とても魅力的だったらしい。壮大な神話みたいな感じだろう。

キュヴィエより少し遅く生まれた社会学者のオーギュスト・コント(1798-1857)は実証主義を唱える。実証主義というのを簡単に要約してしまうと、経験的事実にもとづいて、理論と

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

か仮説を検証するといやり方に徹するということだ。あらかじめ与えられた神学的・形而上学的な本質論を前提にしないで真理に迫ろうとする。認識論的に言えば、演繹法に対する帰納法になる。演繹法は一般的に正しいとされる原理（大前提）とその次の（小前提）を組み合わせて、結論を導く。大前提は一般的に正しいとされていること（あるいは、自分が正しいと思っていること）だから、例えば、「神様は完璧な存在で、神のなすことはすべて正しい」を大前提として、「その神様が世界を作った」を小前提として、「だから、世界は正しい方向に導かれている。」という風にロジックを組み立てる。たいていの日本人は無神論者あるいは仏教の様な多神論者だから、「演繹法って、アホジャン、正しい結論をミチビケナイジャン」と思ってしまう。これは有名な例なので取り上げたのだが、これを論破するにはどうするかというと、一般的には「だって現実の世界は、戦争とかあって、ちっともいい方向に行ってないジャン。だったら、神様、完璧じゃないか、神様が作っていないか、どっちかジャン。」とやる。この反論も、演繹的なのだ。こっちの方は、「戦争とかあって、世界が良い方向に行っていない」という、一般的認識を大前提にして、だったら、仮に神様が完璧ならば（大前提）、神様が完璧世界を作っていない（小前提の否定）か、その神様が世界を作っていれば（小前提）、その神様が完璧でない（大前提の否定）と、結論すべきだという構造になっている。どちらも、正しいと思う主観的認識を大前提にしていて、演繹的なのだ。帰納法では、対象物と自分は切り離されていて、自分が主観的に正しいと思うことを大前提にしない。というか大前提がない。帰納法でこの議論に決着を付けようとすると大変だ。まず、良い方向に歴史が進むということを定義しなければならない。仮説的に、何か良い方向の指標を作って、様々な歴史的事実を取り上げて、一つでもいいから、歴史的に良い方向に向かっていないという事例を反証として挙げることになる。歴史などというものは、記述した奴らの主観で書いているから、正しいかどうかわかりはしない（典型的なのは中国史。全王朝を徹底的に悪者に仕立てる。）。まあ、いつの時代でも、世界の状況に不満を持っている人がいて、戦争が絶えないから、一方的に良い方向に向かっていないと言えるのかもしれないが、それも私の主観に過ぎないだろう。この論争には決着がない。というか、帰納法を使った実証主義には、絶対に正しいという概念がないのだ。経験的認識だから、まだ経験されていない事実が出てきて、それが定説を否定する物であれば、定説が修正されるだけのことだ。つまり、帰納法では無限に真実に近づくことはできるが、真実には到達しない。科学的に考えるというときの、科学的は、経験主義的に考える（帰納法的に考える。）とほとんど同じ意味だ。だから、科学には「永遠の真実」などはない。今、定説とされている仮説があるだけなのだ。後に、カール・ポパー（1902 - 1994）は、反証可能性でないものは、科学の命題ではない（反証主義）と主張する。反証主義を神様の例で具体的に説明する。神様なんかいないということを、科学者が論じても問題ない。反証として神様を連れてきて、「コンチワ、私が神様です。ヨロシク。」と言わせれば、簡単に反証可能だからだ。反対に、神さまがあると、主張することは科学的に意味がない。「ないことの証明はない」からだ。犯罪捜査で言うと、神様がいないということを直接的に示す物証はない。しかし、神様が出てきて、

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

「コンチワ、ヨロシクネ。」 と言っていない 以上、状況証拠的 には、 神様はいないという のが、 現代の無神論者 のロジック だ。

コント は社会学者 だ。自然科学 の場合は、だいたい、 帰納法的 に考えられるのだが、 社会科学やビジネス の世界、特 に、その 時代の社会についての 研究では、帰納法的 にやっていたら日が暮れてしまう。だから、 演繹的 な議論がどうしても 入ってくる。 社会のことを 実証的 に研究しようと 思うと、広範 な事例を調べて、同じような 条件であることがあった 場合となかった場合を比較しなければならない。そんなことはいつでもできるわけでもないし、 厳密に同じような 条件下 で、一方で何かが起こり、一方で何かが起こらないというような 事例は、めったにないだろう。 それを 解決するには 実験をすればよいのだが、これを 社会実験 という。実際の社会の中で、同じような 条件の2つの グループ あるいは2つの 地域で、一方で何かをして、 一方で何かをしないで、そのようなことをする 前と後で変化を観察することになる。そんな 実験を社会が許すことは 稀だろう。 内容によっては、 倫理的 に大問題 だ。一方、演繹法で大前提 を誤るととんでもないことになる（ 例：アジア 的やさしさ： 実証主義的 であるべき新聞記者 が、現地に行かずに 自が信じる思い込みによって 記事を書いて、それを 信じた多くの人が死んだ。）。実証主義的 に事実を確認することは 欠かせないのだが 、それがいつでも可能とは限らない。 社会科学 で、演繹的 な議論をしなければならない 場面は、少なからずあるだろう。それでも、 コント は実証主義的 に社会を研究すべきだと 考えた。これは 大変なことだ。 社会科学者 が実証主義 を主張したことは、 帰納法的 な認識論、科学主義 がかなりの 広がりを 持って社会に受け入れられつつあったことを 意味するのだろう。

一般的 に言って、 20 世紀以前 に人種について 何かを述べた人は、 多かれ少なかれ 偏見を持っていた。 実証主義的 であった リンネ でさえ、 人種については 偏見を持っていた。 彼は、人種を Homo sapiens に属する亜種だと考えて、 ヨーロッパ 人 Homo sapiens europaeus ：白くて、 活気にあふれ、 想像力に富む。 アジア 人 Homo sapiens asiaticus: 黄色くて、 憂鬱な気質、柔軟性 に欠ける。 アフリカ 人 Homo sapiens africanus: 黒くて ずるい、 怠惰、無頓着 な気質。 アメリカ 人（ インディアン、インディオ） Homo sapiens americanus ：赤っぽくって、 粘り強い。と 分けた。 差別的でないとは 言わないが、まあ、ここまでは 良い。それ以外にも亜種があって、 野生人（ Homo sapiens ferus ）、奇形人（ Homo sapiens monstrosus というのがあって、これがなんだかわからない。 多分、当時 の人から、 旅行話や噂話や聞いて、そういうのもいるんだなと 思って、適当に書いたのだろう。 彼は、何でも分類したい人だ。 何かを分類せずにはいられない。 私の周辺にもそういう 人はいる。 だけど、 十分なデータ がないから。 ヨーロッパ 人、アジア 人、アフルカ 人、アメリカ 人（ アメリカン・インディアン） についても、 適当に書いてる 感じだ。 彼自身はヨーロッパ 人だから、 白人をよく 書きたいという 心理はわからないでもない。 差別意識 も悪意もないのかもしれないが、こういうのが 意外と厄介だ。偏見に基づく人訴差別 という 意味で、よく 取

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

り上げられるのは、 アルチュール・ド・ゴビノー（ 1816 -1882 ）だ。この 人が、「人種不平等論」 を書いた。ドが付くから、 貴族だと 思うかもしれないが。 自ら伯爵と名乗っただけだ。この 辺りからわかるように、かれは 貴族主義 というか 古典主義 だ。だから、なんでも古いものが 好きで、 人種も神が作ったものだから、それぞれの 人種がそれぞれの 役割を果たすべきだと 考えたのだと 思う。それぞれの 役割があるのだから、 人種は混ざり合ってはいけない。 彼は混血が進むことによって、その 役割があいまいになり、 ヨーロッパ が退化すると 考えた。はた 迷惑な話だが悪意はない。 彼は白人の優越性 は唱えたが、 反ユダヤ主義ではな かった。むしろ、 ユダヤ人を知的で高潔な民族だと 評価していた。 というか、 ヨーロッパ のユダヤ教徒はほとんだ 白人だ。

当時のヨーロッパ の人たちは、 実証主義的 な説明に納得する一方で、依然として キリスト教的なものに 縛られていたから、 科学的な成果をキリスト 教の神話と結び付けて聖書に書かれたことを 事実として、それを 実証しようとする 人たちがいた。 具体的に言うと、 ダーウィン の進化論を受け入れたうえで、それをも、 神の意志として、 聖書を解釈しようとする人たちがいた。 今でもいる。 実証主義 といっても 、あそこにあれがある、あそこのこれが書いてあると りいうような、 断片的な事実を、つまみ 食い的にとりあげて、つなぎ 合わせただけの 代物なのだが、 結構、 説得力がある。いまでも、 テレビのドキュメンタリー 番組で何か言われるとすぐ 信じ込んでしまう 人がいるのと 同じことだ。

セム語族ないし セム族という 言葉を使ったのは、 アウグスト・ ルートヴィヒ・ シュレーツァ（ 1735 -1809 ）という 人らしい。 1781 年に彼が書いた論文の中に、セム族という 言葉が使われた。 セムはノアの箱船のノアの3 人の子供の長男の名前だ。ここが 全くよくわからないところなのだが、 ノアの箱舟が陸についた 後、ノアは、ブドウ園を作って葡萄酒 を飲んで、 酔っぱらって 醜態をさらす。 その時。醜態 をさらした （裸で居眠りした） ことを周りの 人に告げたのが ハムで、それをかばったのが セムとヤテペ だ。聖書というのは 時代考証もあいまいなどうでもよい 本なのだが、 その時代の人がどんな 枠組みでものを 考えたかは推測できる。 ハムに怒ったノアは、ハムの子供のカナン が呪われるといった。なんだかわからないけどそう 言った。 多分、相手 をののしるときに、その 子孫が呪われるというような 言い方をしたのだろう。なんだか、 弱虫がギャーギャー 言っているようで 嫌いだ。だいたい、 醜態をさらしたのは 自分自身 だ。それを 告げ口されたのが 気に入らないなら、せいぜい、「この オッペケペー め」といったほうがまだましだ。 しかし、これで、 ハムの子孫は悪者になって、 セムとヤテベ が良い人という 評価になって、それぞれの 子孫が、中東、 地中海沿岸、 北アフリカ、ヨーロッパ、インド の一部に拡散して住む事になるのだが、 それで、 この聖書に書かれた 故事を使って、アラビア 語、アムハラ 語、ヘブライ 語などを。 セム語族と呼ぶことにしたらしい 。罪を犯したのは父親のハムなのに 、その子のカナン を呪ったというのは、 カナン の子孫になる 民族を呪った という 意味だろう 。だとすれ

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

ば、これが世界初の人種差別発言で、ハム人は呪われているから、セム人に仕えるべきだという ことになる。この日を「世界人種差別記念日」とすべきだ。もちろん、シュレーツは、分布する地域が、たまたま、ヘブライ語に近い言語が使われていたので、聖書にちなんでセム語族と名付けたのだと思う。当時のヨーロッパにしてみれば、聖書の話は知っているから、パッとイメージがわく名称としてセム人、セム語族という言葉を使ったのだろう。この場合も、シュレーツに悪意はなかった。それはそれとして、3つのうちの2つに子孫集団があるならば、もう一つのヤテペの子孫はどこへ行ったのかという余計なことを考えてしまう。ハムがアフリカ、セムが中近東ならば、残るヤテペは、黒海やギリシャ、ローマの方面に展開して、ヨーロッパ方向に向かうというのがありそうな話だ。比較言語学の初期には、これが、ヨーロッパの白人の祖先と信じられていたようだ。また、ウイリアム・ジョーンズは、ヤテペ人の一部は、インドに行ったと述べている。そうだとするとそれがアーリア人になるのかもしれない。これが、多分、アーリア=ゲルマンという発想のもとだ。ネットを探すと、よせばいいのに、今でも、この辺りの話を熱心に分析したり、解説したりしていて、何とか人がカナンの子孫で、かんとか人がセムの子孫で、ヤテベの子孫が何人だなどと言っている。ヤテベの名前の意は広いだから、多分、中近東から離れたところについては情報がないので。その他大勢。広いのがヤテベになっている。いい加減な話だ。セム、ハム、ヤテベが実在したとは思えないから、全部、科学的根拠のない意味のない分類だ。多少の民俗学的な話をつまみ食いして、切り張りした与太話だと言ってよい。まあ、元々、何かだという、過去の立ち戻った話をするのが好きなやつはいる。そういうやつが、インド・ヨーロッパ語という、比較言語学的には根拠のある話が出てきたので、それに飛びついて、つまみ食いしたのだ。

この話は、ユダヤ教が成立する前の話になる。ユダヤ教が成立するのは、アブラハムが出てきて、神と契約したからだ。だから、この話では、ユダヤ教とキリスト教は同根ということにはなるので、反ユダヤには結びつかない。

聖書ではアブラハムはセムの子孫だ。アブラハムの信仰を神が疑わなくなったのは、アブラハムが晩年にできた大切の子供イサクを生贄にささげたからだ。アブラハムは900年以上生きたのだから、晩年とは言えないかもしれない。それで、神はアブラハムの信仰を信頼し、アブラハムとその子孫にカナンの地を与え、子孫繁栄を約束する。これを読むと、私は、この神様はずいぶん器量の小さい神様だと思う。自分を試すなと言いながら、相手を試している。こういうやつとは付き合いたくないというのが本心だ。(実際、つきあってないけど。)。だが、しかし、アブラハムは、神と契約を結ぶ、アブラハムの子孫がユダヤ人ということでユダヤ人という言葉が確定しそうだが、ユダヤ人的には、ユダヤ人の母親から生まれた人はユダヤ人だ。それに加えて、多民族でもユダヤ教を信じた人間はユダヤ人だ。ここがちょっと難しい。遺伝的生物学的な意味のユダヤ人と、慣習や文化を共有す

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

る集団という意味のユダヤ人が両方含まれているのだ。 いずれにしても、 キリスト教もイスラム教も、ユダヤ教の宗教改革みたいなものだから、この 時が。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の一神教の記念すべき始まりだ。それで、キリスト教、ユダヤ教、ムスリム教はすべて、アブラハムの子孫ということになる。

簡単に、紀元前ちょっと前としておこう。 イエスが、マリアとヨセフの子としてベツレヘムの馬小屋で生まれた。かなりかなり 賢い子だったらしく、 子供のころからユダヤ教のラビなんかと神学論争ができたらしい。 30過ぎて洗礼者ヨハネのところに行って、洗礼してもらった後、ガリラヤ湖に行って、ガラリア湖の漁師たちに新しいユダヤ教を普及する。イエスの父のヨハネは大工だから、イエスも大工仕事は上手で、多分、船大工としてもかなり腕が良かったのではないかと 思う。そういうことが 上手だから、ガリラヤ湖の漁村の人たちに人望があって、説教が上手だったのではないかと 思う。おまけに、ガリラヤ湖の魚を塩漬けにして、ローマに流通させていた、魚問屋のおかみさんの マグダラのマリアが、パトロンについたから。その 宗教は急速に普及する。これをねたんだのが、 当時のユダヤ教の指導者で、人気のあるイエスに嫉妬して、神に対する冒とく罪として裁こうとして、最後は、ユダヤを植民地としていたローマ帝国の総督によって、磔になったと聖書には書いてある。このことの キリスト教的意味は、当時、ユダヤの人々は、ユダヤ教の戒律から言えば、かなり 堕落した生活を送っていて、ユダヤ教の神様からすれば、当時のユダヤ人は、罰を与えて殺すべき存在だ。イエスが死んで、その罪を肩代わりしてもらう。そのおかげで、彼らが死なずに済んだのだから、身代わりになったイエスの教え通りに、ユダヤ教の戒律を守って生きるように ということになる。 この教えが受けたのだと思う。罰は怖いから、罪が許されるというのは 悪くない。ユダヤ教にしても キリスト教にしても、その神様は無茶苦茶怖い存在で、人を罰して殺す。しかもかなり 狭量だ。彼が世界を作ったのだとすると、彼の作ろうとしたものは、ひどく 教条主義的で大らかさがなく、アート（人が作るもの）としては、傑作にはなりそうもない。 だが、彼が作った世界は、神様の思い通りにならなかった 失敗作で、おかげで 結構面白い。怪我の功名というやつだ。その狭量な神様が与える罰を、イエスに身代わりになって 受けてもらうのは 悪くない。ということで、キリスト教徒、ユダヤ教が分かれるのだが。 この聖書の話に基づけば、キリスト教徒も民族的にセム人だ。

ジョゼフ・エルネスト ・ルナン（1823 -1892）という フランスの宗教史家が、1863年に「イエス伝」を書く。この中で、彼は、イエスを人間としてとらえて、彼の卓越した博愛思想をたたえている。彼は、もともと宗教家になろうとしていたが、 啓蒙主義あるいは近代の科学主義に傾倒して、不合理な迷信的な部分を全部否定して、聖書を合理的に解釈した。その結果イエスを卓越した倫理観を持ったと「人間」と評価した。この本は大変評価が高かったらしいから、 宗教的なものを、近代合理主義の立場から見直すというのは、当時のヨーロッパで、一定の支持を受けていたのだろう。 彼は、教条的で陰鬱なユダヤ教からは、イエス的な発想は出てこないと考えた。イエスの思想を育んだのは、ガリラヤの地の

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

開放的 な明るさ である として、 もともと イエス 的な思想 はもともと ガリラヤ にあったとした。そして、 ガラリア の人 は、 それを セム の 子孫 ではなく 、ヤテベ の子孫 = 中央 アジア からヨーロッパ に分布 した アーリア 人だとした 。彼にとって、その アーリア 人は、 古代、 バラモン 教を 作った、 明るく 聡明 に 人たちだ。 とにかく 彼 はそう 感じたのだろう。 「セム 系言語の一般史および比較体系 」(1855) では、セム族と アーリア族を決定的 に異なる人種として区分して、 アーリア人が最終的に世界を主導することになり、その時、セム人は もはややることがなくなって、衰退すると書いた。 この辺りは、どうしてそうなるのか、私にはわからないのだが、 「イエス伝」を読んだ人に聞くと、彼はかなりの名文家らしい。 そういう人は、興奮すると、文章の流れで、わけのわからないことを書くのかもしれない。
とにかく、 陰鬱 な、教条主義的 、一神教 の民族宗教（セム族）と 、明るく、開放的で、慈愛に満ちた、世界宗教（キリスト教）という対比になっていて、もはや、 ユダヤ教とキリスト教という宗教の対立、あるいは民族な対立ではなくて、遺伝子を共有する集団（ 人種）の対立 になっている。 不思議なのは、 一神教に対する、キリスト教という対立構造だから、キリスト教は多神教 側 になっちゃてる。多分、アーリア人が作った、バラモン教が多神教だからだと思う。 衰退するとされたユダヤ人の方からすれば、何を阿保なこと言っているんだという程度の話だ が、 多くの ドイツ人（アーリア人） にとっては、壮大でロマンチックな、夢のある話だったかもしれない。 劇的で壮大なスケールを持った話で、ワグナーの音楽のようだ。

この 、ユダヤ教 （セム 人） とキリスト教の対立が、人種的なものだとする考えかたが広がったところで、 ジャーナリストの ヴィルヘルム・マ ル(1819 -1904) が「ゲルマン民族に対する ユダヤ民族の勝利」を出版する。彼は、ユダヤ人がドイツで 、社会的・経済的に成功をおさめ、 影響力を持つことを脅威と感じて、 セム 人がゲルマン人の文化に侵食 して、支配 し、それにゲルマン人が抵抗できないと主張した。 ルナンの主張では、アーリア人が最終的に理想化された世界を支配して、セム人（ユダヤ人）は勝手に消滅するのだが。マルの主張では、成功すべきアーリア人を妨害するセム人（ユダヤ人）というとらえ方になっている。 それまでの、宗教的な違いや文化的な違いによるユダヤ人差別とは内容が変わってしまった 。その後に、第一次世界大戦の敗北とドイツの不況という歴史が始まる。 その過程で、 有害な人種としてのユダヤ人という、考え方が広がる。

以上が、ヒトラーが 全体主義的にドイツを支配するための道具として用いた、ユダヤ人差別が、社会に受け入れられた背景なのだが、一つの疑問がある。目的はユダヤ人差別ではなくて、全体主義 （fascism）の実現だろう。ユダヤ人差別は そのための一手段だ。 もちろん、ユダヤ人の財産、知識、技術などを 没収して利用できるという利益があったかもしれないが、 そもそも、全体主義的な統治をなぜ受け入れたのか ということを、分析しなくてはならない。 その当時、ドイツには、相当数の知識人がいたはず なのだが、その人たちが

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.

全体主義になぜ反対しなかったのかという疑問である。こちらの方がもっと重要で難しいかもしれない。

（紅旗征戎非吾事　VI に続く）

Printed by BoltPDF (c) NCH Software. Free for non-commercial use only.